
独りの願い

森 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りの願い

【Nコード】

N1444B

【作者名】

森 翼

【あらすじ】

これは、龍の灯火の番外編の、無敵独兵のストーリーです。龍魔結合の乱の時の裏話、ライズの正体の暴露をしています。今までとは違って少し愛とは何かなんてのも考えさせられます。新しい世界を御堪能下さい。

彼は、悠久の昔からこの龍神界に生きてきた。

しかし、彼の事を今も知ってる者はもう少ないだろう。

彼の名は無敵独兵ラファール。

かつて、龍神頂や私と共に戦った戦友であり、昔の將軍である、無敵独兵ラファールについて、まだ若い將軍、森羅万象の覇者ニコラスにでも話してやるか。

私の名は、無敵独兵ラファール。出陣の時を待っている。

紅蓮の剛翼が魔界軍司を倒した事により、龍魔の狭間で龍神軍が攻勢に転じ、魔界へと進行している。

龍界と魔界は対立し、戦乱の時代になってしまった。

その戦いよりもっと昔から、一人の女性（魔神だが）に出会い、愛してしまった。

彼女の名は、毒の華シンファニーといった。私は愛してしまったのだからしょうがない、と思ったが、魔界の指導者の娘であるシンファニーを愛する事は許されない事だとわかっていた。故にそれは誰

にも口にしてない。

会うたびに深くなるこの気持ち。シンファニーには伝えてないが、きつと気付いてるだろう。

互いの身分も考えたりせずに、遊んだ事もあった。…これはけっこ昔の話だけれど。

私はシンファニーも、私を愛していると薄々感づいている。

しかし、20年前から永遠のように続く、『龍魔結合の乱』により、その愛は叶わぬものとなりかけていた。

けれど運命は、私をシンファニーと逢わせようとした。私はこの事を素直に喜んだ。

彼女が住んでいる、魔界の、西部侵略担当になった。

うまく事をはこべば、彼女を救い出し、この戦いに勝つ事もできる。そう信じたかった。

数日前の事だ。

「配置を指示する。」

宰相、頭革ウォルスが話し始める。

「創牙の欲望は北部に城を構えているのは知ってるだろう。」

創牙の欲望とは魔界の指導者、そして、シンファニーの父親だ。

「なので、周りから攻め崩そうと思う。まず、東部だが、私と闇精霊を指揮官とする。」

「わかりました。」

闇精霊と呼ばれた女性はそれに従う。

「次に南部だが、虹精霊と光精霊を、指揮官とする。」

「めんどくさい。」

ひょうひょうとした口調で、自身の仕事を放棄しようとする虹精霊。「何言ってるの、ちゃんと働きなさい。」

柔らかな声で光精霊と呼ばれた女性はだらしのない男を叱咤する。というわけでとりあえず、強引に決定した。

「じゃあ次は西部、無敵独兵と水精霊。」

「了解した。」

即答で返事を返す、水精霊。

その時、私は思い出した。シンファニーが西部に住んでいる事を。

「私も了解です。」

冷静を装って返事する。内心は期待に胸膨らませていたけど。

「最後に中央部、炎精霊と風精霊。もし、紅蓮の剛翼が見つかったらここに加戦させる。」

「任せとけ。」

赤髪の青年は素っ気なく返事する。

「なんでこのロリコンと一緒になのー!？」

緑の髪をしている、ロリ要素たっぷりの、少女のような顔立ちの女性が怒る。けど、

「配置上仕方ありません。我慢して下さい。」

ウォルスがそう告げる。

私もだが、その場にいた龍神はみんな笑ってしまった。

「まあ、そういう事らしいからよろしくな。」

炎精霊の言葉に対して、

「こいつキモいー。」

と風精霊が嘆き、また、みんなが笑った。

結果から言うと、私は明日には西部でシンファニーに会う。そういうことだ。

そしてこの日が来た。

私は、自ら出向いてないが、戦況が有利に進んでいるのをいいことに、シンファニーを捜しに行った。罰は当たらないだろう。

しかし、何処を捜しても見つからない。

焦りを押さえ込み、暗い路地を歩く。家にはもうとっくに押し掛けた。

シンファニーは誰かに殺されたのか、そう思いながら、本拠地まで数十メートルのところに戻って来た。

何故見つからない。

ほかの戦場で戦っているのか。

本拠地の裏から、ひっそりと、水精霊の眼前に行き、戦況を尋ねる…

「水精霊、今の戦況はど」

…前に、何かが、腹部に刺さる。

俺に気配を悟られずに行動できる魔神を、俺は知っている。ああ、忘れもしない。

ほら…な…。やっぱり。

横を見ると、捜し続けた面影が、そこにあった。

毒の華シンファニー

水精霊も啞然として、動けなかった。

シンファニーは必殺の一撃を、俺に見舞って、そして、ショックでその場に倒れ込んだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

必死に謝っていたが、俺の耳には入ってこない。

裏切られた。あいつと、永遠の時を育みたいと思った事もあった。

あの優しさは、あの温もりは、全て、

…嘘だったのか。

いや、もともとこの予定だったのかもな。

とんだ茶番を演じたな。

でも、

「それは、シンファニーからの、俺に対する感情表現か？」
言い残した事がある。

「なら、俺からも言わせてもらう。例え、全てが嘘だとしても、俺はおまえを愛していた。」

ふっ、と、鼻息をたて

「俺が、死んだ後には言えないからな。水精霊、世話になった。」
しばしの沈黙。の後、

「何言ってるんだ。正気を保て。」

興奮気味に叫ぶ。

しばらくすると、シンファニーが口を開いた。

「私も、あなたを愛していました。偽りはありません。でも、あれは、あなたに対して、私の毒牙を発動させないとおまえを殺すと、父に言われたからです。でも、」

やや間をおいてから、振り絞る様に言う。

「そんなものよりも、あなたへの、そう、ラファールての愛のが大事でした。だから、」

光が出現する。

水精霊は、ただ見守る。

「今、こうして、父の命令にも従いました。ならば次は、あなたへの愛を行使します。もっと平和な所へ、私の嫌いな戦いのない場所に、ともに逝きましょう。」

「シン、ファ、ニー、まさか…、」

私は表面上の傷が塞がっている事に気付く。
この光のせいだろう。

「そう、天界です。」

光が私を包んだ。

その時だ。

「氷柱」

水精霊の声とともに、巨大な氷柱が発生して、シンファニーの体を貫く。

「今、無敵独兵に、いなくなれたら困る。すまないが、消えてもらう事にした。」

水精霊は、いつもより冷静そうな目付きで言う。

その場に倒れ込んだシンファニー。それと同時に光も消える。

私は、呆然としてしまった。

その私に向けて、シンファニーは囁く。

「やっぱり、私のやる事はうまくいかないね。水精霊さんが言う通り、もうすぐ私は消える。でもね、私はあなたに最後のお願いがあ
るの。」

「…なんだ？」

「これからは戦いが無くて済むような世界に世界を導いてほしいの。」

「…」

「それがまず一つ目。もう片方のお願いは…、」

「…」

「私はあなたを、死んでも愛し続けます。だからあなたも、私を忘れないで。」

愛してくれ、とは言わなかった。

「最後の、昔から、かわらず愛していたラファールへの、最後のお
願いだよ。いや、約束だよ。守ってね。」

「当たり前だよ。だって私はシンファニーを、」

言葉が終わる前にシンファニーは消えていった。

私は、回復の精波を受けながら、水精霊に拷問する。

「何故殺した？」

「仲間愛ですよ。」

「おまえを一生許さないからな。」

「この戦いに勝てるならそれでも構いません。」
「そうかい。」

その後、戦いの終結を迎える時、戦いのない、平和な世界の話を出して、私は思うように力をふるえなかった。その結果が龍神頂と、創牙の欲望の死になったのかもしれない。

最後に龍神頂は言葉を発する。

…力の封印？

そうか、ならば次世代を治める、皇子、皇女、の召し使いにでもなりながら、教養をし、平和な世界を作ってもらおうか。

…ならば強力な力はいらない。

私は、次世代の王者が生まれるまで私は心を休めよう。

私は、次世代の王者の死を守らなければいけなくなる時まで、力を封印しよう。

龍神頂が消えた。

沈黙の中、言葉を発する事にした。

「私はこの力を封印し、龍神王様の子が生まれるまでは、人間界にでも行ってる。子が生まれたら召し使いででもやらせて下さい。」

「何故、そんな事をするのだ？」

「少しだけ、休ませて下さい。」

そう言って、ラファールは姿を変えた。

「これからは、…金の輝きライズとでも呼んで下さい。」

そして、龍神王、六精霊を残して去って行った。
紅蓮の剛翼はまだ見えないようだが。

こんな事があったとは知らずに龍神王は、森羅万象の覇者に、働かない將軍にはならないように、と、伝えた。

ついでに前半だけ活躍して、消えていくような將軍にはなるなども、言っておいた。

あれ？龍神王さん、ラファールの事なんも話してないよ？

ラファールは、あの時言おうとした言葉を思い出す。

私も、シンファニーを、愛している。

その約束を俺は、おまえへの愛を追求するために必ず守ってみせる。
これが俺の気持ち。

これが俺の愛。

(後書き)

どうでしたか？感想とかあるとうれしいです。是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1444b/>

独りの願い

2010年11月2日20時19分発行